

吉野靜

(喜)

シテ
静御前
ワキ 佐藤忠信
狂言 衆徒

所 大和吉野山

「定なき世は中々に。く。憂き事や頼なるらん。

抑これは判官殿の御内に仕へ申す佐藤忠信にて候。扱も頼朝義経御中不和にならせ給ふにより。判官殿は此御山を頼み御籠り候所に。衆徒心がはり仕候により。今夜此山を御開きにて候。さる間某は此山に残り。防ぎ矢射よとの御事。弓矢取ての面目と存じ。某一人此山に残りて候。承り候へば。大講堂に衆会の在る由申し候程に。都道者にまぎ候。

サシ「げにやたとへても憂きは変らぬ習とて。其古人は清見原の。天子の御身なりしかども大伴の皇子におそはれて。吉野の宮を出で給ひ。山野に迷ひ給ふとかや。痛はしや判官も世の讒言の晴れやらぬ。

雲も奥ある吉野山。隠れ家ながら置きかぬる。御身の果こそ悲しけれ。さるにても我君判官は。

何所の里如何なる所にかおはすらんと。心細くも
そなたの空を。三吉野の霞の内の花の滝。く。
落ち行く方は白浪の。誰に吉野の奥やらん我身の
果は恨めしや。隔てじものを君と我。心一つの二
道を。暫しへ頼む迷かな。く。や。これに御
入り候は静御前にて渡り候か。

シテ「御身は忠信にてましますか。

ワキ「さん候防矢仕れとの御事により。某一人留り防矢

射。難なく君をも落し申して候。扱静は何とか
なり給ふべき。返すべくも御いたはしうこそ候へ。

シテ「されば唐土の吉野山に籠る共。遅れどとこそ思ひ
しに。女の身とてはかなくも。捨て残さるゝ三吉
野の。山路に迷ひ里に下りて。今迄かうで候。

ワキ「や。大講堂に当つて貝鐘の音の聞え候。これは推
量仕りて候。我君を追かけ申すべき衆会の貝鐘に
て候べし。きつと物を案じ出したる事の候。御身

は勝手の御前に御参り候ひて。神法楽の舞を御舞
ひ候へ。我らは又都道者の体にて。勝手の御前へ
参り候はば定めて衆会の面々都の事を尋ね申すべ
し。終には御中直りの由を申し。兎角時刻をうつ
し。我君を心静に落し申さうとするにて候。か様に
心はめぐらせ共。身は唯独忠信が。思ひ廻らす計
りの事。末あらはれば如何ならん。

シテ
「思へば涙三吉野の。よし遁れずと君をだに。落し

申さばそれ迄ぞと。

地
「思ひ切りつゝ忠信は。く。衆徒の詮議に参らん
と大講堂に出でければ。

シテ
「静は其まゝ。

地
「勝手の御前に参りけりく。 (中入)

ワキ
「これは都道者にて候が。か様の衆会の御座敷とも
存ぜず候。御免候へ。御兄弟の御事にて候程に。
終には御中直りの由申し候。

狂言
「シカぐ。」

ワキ 「唯十二騎にて御開きと申し候。」

狂言
「シカぐ。」

ワキ 「暫く。十二騎と申せども。かたぐ／百騎二百騎にも勝りたる兵達にて候程に中々思し召し留り候へ。かやうに申すは都の者。当山を信じ参る上は。いかにも御寺も宿坊も。難なくおはしませかしと。思へばかやうに申すなり。此上は兎も角も。」

地 「御はからひぞ吉野山。／＼。よしなき申し事。洩れ聞えなば判官の。後のとがめもおそろしや御暇申し候はん／＼。」

シテ 「さても静は忠信が。其契約を違へじと。舞の装束かきつくるひ。忠信遅しと待ちければ。」

ワキ詞 「これは都道者にて候が。静の法楽の舞の由承り候ひて。下向道を忘れて候。とても法楽なるべくは。今少し舞を御はやめ候へ。」

シテ「何のう都の人と聞けばなつかしや。義経御道せば
き事。世上の聞えいかなるぞ。都人こそ知るべけ
れ。

ワキ詞「終には上は御一体と。聞くより都は先非を悔ひて。
皆々恐れ申すなり。

シテ「扱はうれしや我君を。くはしく知るか都人。

ワキ詞「あまりに事延び時うつりぬ。急がせ給へ舞の袖。

シテ「げにのう言葉多き者は品すくなし。かやうに我等

ことはり過ぎば。なかく人もあやしめて。もし
もそれとか三吉野の。かつて知らすな。

一聲「静に囁せや。静が舞に。

地「衆徒もいきどほりを忘れけり。

シテ「神もや納受し給ふらん。

地「げに此御代の静が舞。

クリ「それ神は人の敬ふによつて威をまし。人は又神の
加護によれり。

シテサシ

「然るに彼判官は。神道を重んじ朝家をうやまひ。

地「頗る忠勤をぬきんでゝ。私のかへりみ更になし。

シテ「人讒し申すとも。

地「神は正直のかうべに宿り給ふなれば。静が舞の袂に。暫くうつりおはしまし。義経を守り給へと。祈るぞ哀なりける。

クセ「そもそも景時が。その讒言の水上を。思へば渡辺や。流るゝ水に満汐の。逆櫓たてんと浮船の。梶

原が申しし事。よも順義にて候はじ。されば義経は。すぐに治めし三吉野の。神のちかひの真あらば。頼朝も聞しめし直され。義経執節の勅を受け。

洛陽の西南は。これ分国となるべし。さあらば当山の。衆徒ことぐく参洛し。帰依渴仰の御袖に。めぐみをいただき給ふべし穴賢。不忠なし給ふな御咎は候はじ。

シテ「但し衆徒中に。猶いきどほり深うして。

地 「進みて追つかけ給ふとも。其名きこゆる人々を。

討ちとゞめ申さんは。片岡増尾鷺の尾。さて忠信
はならびなき。精兵ぞよ人々に。防ぎ矢射られ給
ふなど。語ればげには衆徒中に進む人こそなかり
けれ。賤やしづ。(序の舞)

シテ
「賤やしづ。賤の苧環。くり返し。

地 「昔を今に。なすよしもがな。大方舞のおもしろ
さに。く。時刻をうつして進まぬもありけり。

又は判官の武勇に恐れてよし義経をばおとし申せ
と。詮議を加ふる衆徒も有りけり。さるほどに時
うつゝて主君も今は忠信が。賢き謀に難なく君を
ば落し申し。心しづかに願成就して。都へとてこ
そ。帰りけれ。